



# 鳥見の記 自肅中

第15回 小春日和に...

2020.10



稲刈りが終わる頃、小貝川の福岡堰の堰が開けられると、浅瀬の水溜まりに群れを成したダイサギが見られます。早朝、朝日に燃えるようなオレンジ色に染まる浅瀬で小魚を啄む<sup>ついで</sup>ダイサギの食事情景を(表紙上段写真 日の出 5:45 頃)、夕方には、落ちゆく陽を浴びて淡くオレンジ色に輝くシラサギの羽づくろいの姿や一本足でくつろぐ(仮眠する?)風景(表紙中段写真 夕暮れ 5:50 頃 セイタカシギが一羽混じる)が見られました。

そして、朝晩冷え込むようになり、みずき野のサクラやハナミズキの葉が路面を薄茶に染め、さらに季節が進んで寒さが増すと、今年もきっと調整池で群れで遊ぶカルガモが見られるようになるでしょう。近年は 30 数羽を数える程に増えてきましたが、今まで「どこで」「何をして」過ごしていたの难道う? 春先から夏・秋口まで各自別々に水田や小貝川で過ごし、涼しくなると春から育てた子ガモを連れて、来年の春まで群れで過ごすようです。稲豊橋近くの取手市農業ふれあい公園でも 20 数羽が確認できます(表紙下段写真 朝 6:00 農業ふれあい公園)。

ブラリーマンは、春先からのコロナ禍で「マスクして探鳥」など息苦しくてする気にならず、かといって「マスクなしのブルブラ道ゆき」は気がひけてできず、もんもんと過ごす日々。「GoTo トラベル」等でいくぶん外出が緩んだものの、「在宅」「自粛」「謹慎中」状態です。世の中、表情が全く読めない「マスク・マン」であふれ、かつてのように会話を楽しんだり、談笑しながら飲食できない生活がいつまで続くの难道う・・・ この冬、インフルエンザの不安も拭えないというのに・・・

そんな自粛の中でも、普段と変わらないルーティーンは、寝床でその季節の鳥の鳴き声を聞きながら目覚め、一日が始まることです。



松の木の<sup>てん</sup>天辺に止まるメスのモズ



鳴きながら移動するオスのモズ

秋口は、モズの「高啼<sup>な</sup>き」である「キィーキィーキチキチキチ」という甲高<sup>かんだか</sup>い声に起こされ、カーテンを引いて外の晴れ具合いや道路の湿り具合いをチラ見。天候次第でカメラをもって散歩するかどうかを見極めながら身支度をして、20分程度の早朝ウォーキングに出かけます。帰れば、朝ドラを見ながら妻と他愛もない会話をし、定番メニューの朝食を食べて日常生活の始まりです。

## モズの高啼<sup>な</sup>き七十五日

モズは、木の葉が色づき秋が深まる頃、電柱や木の天辺<sup>てっぺん</sup>など高い所に止まり、「キィーキィーキチキチキチ」と鋭い挑戦的な声で鳴き、オス・メス関係なく冬まで75日にわたり縄張り争いをする。

モズの高啼<sup>な</sup>きを初めて聞いてから75日目に霜が降り出す。それを二十四節気<sup>そうちう</sup>の「霜降」といい、冬の到来となる。二十四節気とは、太陽の動きの道・黄道を24等分して季節を表現するもの。夏至と冬至で二至二分し、さらに春分と秋分で二分して4等分。そしてそれぞれの間<sup>に</sup>に立春・立夏・立秋・立冬の四位を入れて「八節」とする。一節を45日とし、これを15日ずつ3等分することを「二十四節気」という。

「二十四節気」は天候に左右される農業の季節を知る拠<sup>よ</sup>り所として使われる。今では、年中行事や時候の挨拶などの色々なシーン<sup>けいちつ たいしよ しょうせつ だいかん</sup>で使われている(啓蟄・大暑・小雪・大寒などは天気予報の時などによく耳にする)。



2020年10月10日 雨の日の第1調整池 カルガモが20羽来ていました

第1調整池に「カワセミ」が戻ってきたようです。朝・昼・夕と足を止めて注意深く耳を澄ますと、さくらの杜公園の方角から「キィ〜」という鳴き声とともに飛んできて、所定の場所に止まるのが観察できます。たまに2羽いる時も。(朝方だけですが)声だけなら少なくとも3羽の鳴き声を聞くこともあります。

ここ 1 年ほどは、野鳥の撮影よりも散歩道の草花や撮り鉄に気が向きがちでしたが、今年の「鳥見シーズン」は、コロナ禍の中で新たな気持ちになって野鳥を追ってみようと思っています。

この原稿を書いている今は、二十四節気でいう「寒露」と呼ばれる時期です。十五夜は終わってしまいましたが、朝晩の空を見上げると白雲がたなびき、澄んだ空に星が瞬いて、コロナ禍を一瞬忘れさせてくれます。

かんろ  
**寒露**

かんろ  
寒露とは、晩夏から初秋にかけて野草に宿る冷たい露のこと。秋の長雨が終わり五穀の収穫もたけなわとなり、冷たい空気と接し霜に変わる前、ツバメ・サシバ等の夏鳥がハクチョウ・ガン等の冬鳥と交代する時期です。



(所定の)ムクゲの枝に止まり餌を狙うオスのカワセミ

すっきりした秋晴れは長く続きませんが、みずき野の山里でもヒガンバナやコスモスが咲き、もう少し経てば、調整池の原っぱも黄金色に燃える草紅葉が美しく、散策する人々の心を癒やしてくれる深い秋本番となります。さくらの杜公園で木々の葉が落ちれば、コゲラやシジュウカラ・エナガとメジロの姿を木の枝に見ることができます。そしてカエデが日ごとに色づき、葉色が緑から紅へと移ろうグラデーションは逆光の中で一層映えます。



里山の会によって植栽された夕陽に輝く見事な今年のヒガンバナ



JR 鹿島線 <sup>じゅうにきょう</sup>十二橋駅付近の <sup>よだうら</sup>与田浦のコスモス畑(千葉県香取市)



第2調整池の黄金色に輝く草紅葉の原っぱ



サクラの木々の葉が朝の陽ざしに秋色に映える さくらの杜公園

コロナ禍の世でも、小春日和の日にはちよつと出かけて、温かい日差しの中で自然の美しさに触れたいものです。普段見過ごしていても、結構近場でも「小さい秋」を見つけられるでしょう！



コゲラ



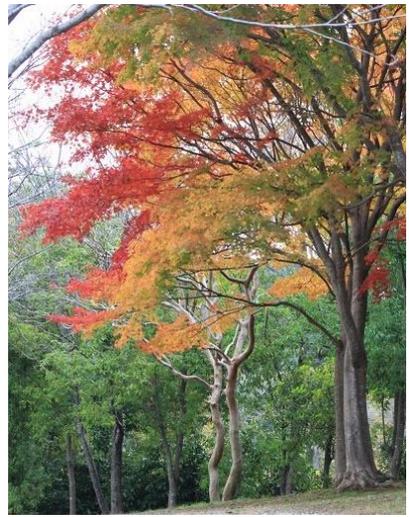
キアカネ



シジュウカラ



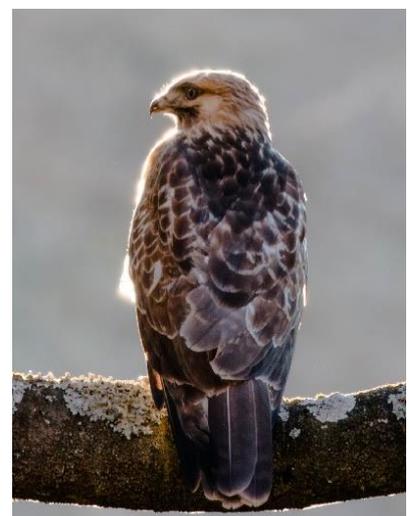
みずき野の秋



松の実を啄むゴジュウカラ



虫を探すアカゲラ



夕日を浴びるノスリ

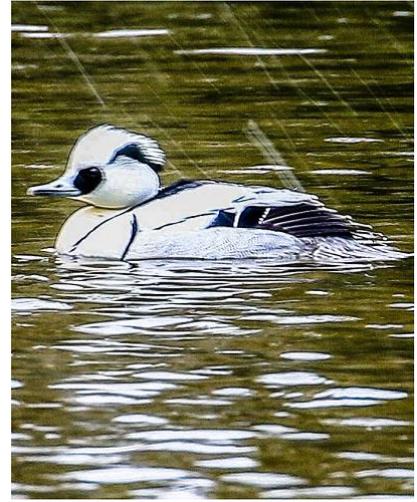
晩秋の日光 中禅寺湖から戦場ヶ原で



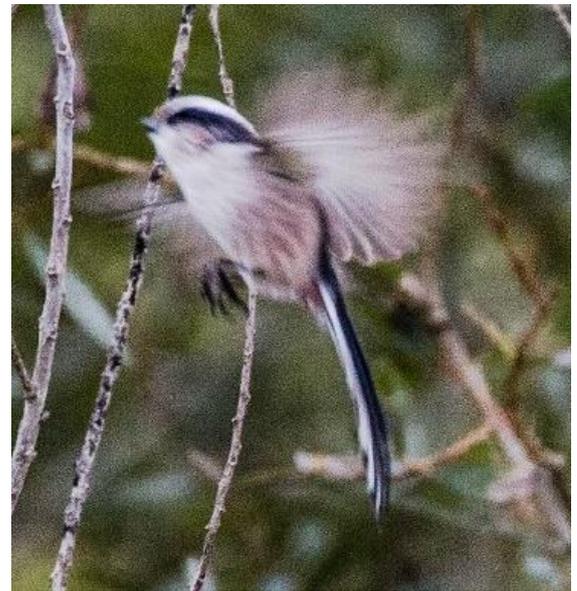
朝食中のダイサギ  
初秋の福岡堰



羽づくろいするオシドリのオス  
晩秋の川村記念美術館の池  
(千葉県佐倉市)



初冬の雨の中でのミコアイサ  
坂田ヶ池総合公園  
(千葉県成田市)



エナガ 初冬のさくらの杜公園



エナガ 守谷市の北園森林公園



エナガ 取手市の農業ふれあい公園



エナガ 3丁目の谷地の雑木林

「鳥見のシーズン」到来にあたって、今年こそはと毎年思うことがあります。それは、野鳥たちの思わぬ仕草を撮り収めることと、未だ撮れない野鳥をアルバムに収めることです。

ここに挙げた5枚のエナガと 6~7 ページに写真を載せたゴジュウカラ・アカゲラ・ノスリ・ダイサギ・オシドリ・ミコアイサは私のお気に入りです。特に「エナガ」は、その愛くるしい丸い目とちょこつとついでる<sup>くちばし</sup>嘴、そして小さい体に似合わぬ長い尾を持つ体形は、私をブラリーマンから「鳥撮りマン」に変身させます。そして、探鳥する楽しみだけでなく、野鳥を追うファインダー越しに見る自然の移りかわりの美し

さに私を目覚めさせてくれました。今では、テントでのアウトドアの楽しみも知り、野鳥とともに一日の時の流れに移ろう風景などを撮影して過ごすようになりました。

自粛の新しい生活様式にも慣れ、小春日和の天気の日には、気の赴くままにどこかに出向いてコロナ禍のうっ憤を晴らし、英気を養ってこようと思います。それまでちょっと『鳥見の記』はお休みです。



みずき野に移り住んで 30 余年、私自身サラリーマン時代には全く気づきもしなかった、自然が残る里山の美しさを教えてくれたのがこの連載の依頼でした。みずき野の住民としてお役に立てればの思いが、気づけば 2 年の長きにわたり 15 回も執筆することができました。これも一重に、『鳥見の記』をみずき野町内会のホームページに掲載することを推挙して下さった本吉様、そして実際に掲載に尽力くださった都・北川・根岸様のお陰です。ありがとうございました。

2020.10 吉日 3丁目のブラリーマンこと 佐藤 健三